

【資料】

Y子は獅子になった

「十年ひと昔というならばこの物語の発端は今からふた昔半もまえということになる。」

(壺井栄「二十四の瞳」より)

久しぶりに手にした一枚の色褪せた色紙が私をふた昔半以上前の青春時代へと導き始めた。

昭和37年11月初旬。大学4年の私は教員採用試験を受けるために比叡山へと向かった。京阪電鉄石坂線(石山寺・坂本間)を走っている電車は古くてマッチ箱のように小さかった。比叡連峰と琵琶湖に挟まれ、細長く鰻の寝床のように伸びている大津の街中をその小さな古い電車は悠長に走っていた。終点のS駅は田舎者の私には初めて見る神社造りの駅舎であった。駅前広場に出て余りにも見事な景色に私は暫時茫然と佇んだ。鬱蒼とした比叡の山、その山麓はなだらかな丘陵となって広がり至る処に幾何学模様の段々畑があった。山から視線を外すと陽光をあびてキラキラと湖面が鏡のように輝く広大な湖が視野に飛び込んできた。こんな別世界のような美しい風景の下で人々が喘ぎ苦しみながら生きていることを私は知る由もなかった。

校長室は絨毯も敷かれていなければ、飾物ひとつ無く机とパイプ椅子のみでそこで面接が行なわれた。当然校長は来春から私が勤めてくれるものとひとりで決めこんで学校の状況を種々説明してくれた。未だに自分の進路を決めかねて曖昧な態度でやって来た私にこれが自分の運命かと思わせるほど校長の話は真剣味があった。1時間ちかく殆ど校長ひとりが喋ったあとで言った。

「何か質問があればどうぞ。どんなことでも結構です。」

「私は勤めだした時、どちらを向いて仕事をすれば良いのでしょうか。」

「どういう事でしょうか、具体的におっしゃって下さい。」

「生徒の方を向いて仕事をすれば良いのか、それとも学校の方を向いて仕事をするべきなのでしょうか。」

「君はどう考えますか。どの様にしようと思っっていますか。」

「いつも生徒の方へ顔を向けて仕事をしようと思っっています。」

「結構です。君の考えどおりにして下さい。教育は教師の自主性やロマンがなければ駄目だと思っっています。」

当時の校長室は貧しく簡素であったが、校長は凄かった。大学生を相手に自分の教育理念を披瀝してくれた。あの時の校長のひとことがそれ以後の私の教員生活に多くの影響をあたえたのだ。

昭和38年4月。大津市S町へやって来た。S町は千古の昔より比叡山延暦寺の門前町として栄え歴史の古い由緒ある閑静な町である町は一区から九区までに区画されていた。私は少し離れた湖畔の農家の「離れ」に寄宿した。年老いた農婦がひとりで細々と農作業をしながら私の食事の面倒をみてくれた。

新任1年目から3年生の商業科クラスを担当した。当時は戦後の第一次ベビーブームの生徒たちが高校に入り、1クラス60名の生徒で溢れていた。出席簿を見て驚いた。同姓の生徒たちが多くいたことだ。山本・山下・山口・山田姓の生徒が20余名も居た。先生に伺うと比叡の「山」の下、口、本、田から付けられたものだという。すべて六区から九区の、あのなだらかな丘陵地帯に住いする者だと言う。先生や生徒たちは彼等を姓で呼ばずA男、B夫、C子などと名前で呼んでいた。当然姓だけでは誰のことか判らないからだ。そして1年後に私に強い衝撃を与えて去ったY子もそんな仲間のひとりであった。かれらは皆明るく素直でのびのびとしていた。特にY子は成績優秀でテニス部の主将をしており優しい心根の美しい少女であった。若くて独身の教師の

利得かどうかは知らないが、彼らは毎晩のように私の「離れ」に遊びにやって来、自分たちの将来や夢について若々しい希望を語り合った。

その当時の就職試験は時期が早く5月頃から順次行なわれていた。Y子はスポーツ能力にも富んでいたがそれ以上に美術的能力に恵まれていた。Y子は自らの意思でTデパート京都支店を選んだ。ダイエー等の大型量販店の出現していない時代で、三越・大丸・Tが三大デパートとして君臨していたのだ。叡山高校から10名ほどの女生徒が志望していたが、その中でY子がすべての面で群をぬいて優秀であった。

テストが終わった6月末の夜、Y子はひとりで「離れ」にやって来た。

「どうした。Y子」

「先生、駄目だと思います。」

「テストが出来なかったのか。」

「いいえ学科テストは全部出来ました。」

「それなら大丈夫だろう。」

「いいえ駄目だと思います。」

「どうして。」

「……………」

口を噤んで涙を流すY子からやっとの思いで聞きだしたのは次の様なことだ。当時新しい方法として集団面接が行われ、Y子も10名程度の受験生と集団面接をうけた。順番に学校名・氏名・現住所を言ったのち、面接官がY子に「本籍地」を尋ねた。大津市S町X番地とY子は明るくハキハキと答えたが、1時間ほどの面接でY子が口にできた言葉はそのひとことであった。誰一人としてY子に質問をしなかった。屈辱的な扱いに震えながらじっとY子は耐えたと言う。毎晩のように「離れ」にやって来るY子たちの住いは六区から九区であり、そこはまた、滋賀県最大の「未解放部落」とも呼ばれていた。

「先生、（未解放）部落を悪いと思いますか。」

「いいや、全然思わない。」

「でも違うでしょ。」

「なにが違うんだ。君は利発で賢い子だ。君の皮膚の下にも、私の皮膚の下にも同じ日本人としての熱い血が流れているだろう。どこが違うんだ。ただ君が部落と呼ばれている処に生まれただけだろう。それがどうしたというのだ。君と私は同じ日本人、否、人間同士と違うのか。」

Y子は自分の内部に積もりつもった苦しみを吐き出すかの様に反発してきた。

「先生だからそんなふうに言ってくれますが、世間は違います。世間は私たち（未解放）部落の人間を一方向的に差別します。」

「さてY子、世間ってなんだ。世間というひとつの生きものがいて、そいつが君たち（未解放）部落の人を差別するのか。」

「……………」

「違うだろう。私が世間だ、Y子、君が世間だ、Aが、Bが、Cが一人ひとり世間なんだよ。本当は一人ひとりの人が『世間』という実体の無いものを隠れ蓑にして個人の意思で差別しているのではないのか。」

「……………」

「Y子、君もやがて数年後には結婚をするだろう。仮に君が（未解放）部落外の男性と恋に落ちたでしょう。彼の親は君にきつこう言うだろう。『貴方はいい人だと思います。でも世間が

（未解放）部落の人との結婚を認めない状況では、私たちも息子と貴方の結婚を認めることはできません。』と。Y子その時君はこう言っておやり、『お母さん（お父さん）貴方が世間です。ね。きっとそうなんです。』と。」

Y子は来た時よりもずっと明るい表情で帰って行ったが、逆に私の気持ちはY子のこれから先を考えると滅入る一方であった。

数日後、予想どおりというかY子一人が不合格になった。企業は事情を説明せず、学校も企業に問い合わせなどしない状態であったが、Y子はもう涙を見せなかった。

同対法が制定されるのは、ずっと後のことゆえ、Y子たちの住む（未解放）部落は貧しく、差別の嵐は吹き荒んでいた。誇りまみれの道は細く曲がりくねっており、A男の傾きかけた家にはムシロしか敷かれていなかった。1年前私がS駅前広場から眺めた美しい段々畑も本当は平地に良い土地を与えられない人々が山の急斜面を切り拓いて作った畑で米はとれず、下から水を運びながら僅かばかりの野菜を作っているのだと判った。樹木の生い茂る山裾に住みながら観山への「入会権」を認められない人たちは、燃料の薪として湖畔に打ち上げられた流木を拾って利用していた。私が一見の観光客であれば美しい眺望にすぎなかった「比叡」の下で差別に苦しむ人々の姿は見えなかったであろう。どこの世界にも二重構造というものはあるものでY子の家は立派で大きく経済的に豊かであった。Y子は東京の美術関係の専門学校へ進学することになった。

2学期、生徒たちは相変わらず毎晩のように「離れ」にやって来た。Y子は何事もなかったかの如く以前の明るい少女になっていた。

私学の2学期は無いにひとしい。1月末で生徒たちは登校しなくなり家庭で卒業を待つのだ。学校に姿を見せない彼らは以前にも増して足繁く「離れ」にやって来た。ところがY子の姿がぼったり消えた。聞くと家に閉じこもったきりで外出しないということだ。病気かと案じられたがそうでもないらしい。卒業式が迫ってきた。前日は家で家族と過ごせと皆に命じた。卒業前夜、突然Y子が一人でやって来た。三和土で立ったまま一枚の色紙を差し出した。

「先生、私が一生懸命心をこめて描きました。」

「有難う。あがれ。」

「先生、高校最後の年に出会った事を私は一生忘れません。」

つぶらな瞳から溢れた珠のように美しい一雫の涙が地につく前にY子は帰って行った。色紙には極彩色で2頭の親子獅子が描かれていた。親獅子は優しい表情で後ろの子獅子を振り返って見つめていた。子獅子は険しい怒りの目で、鬣を逆巻き尾を荒々しく立てていた。子獅子の体全体が怒りに燃えていた。翌日厳かに卒業式が行われた。当時の生徒たちは殆どの者が涙を流した。式後Y子が母と挨拶に来た。目を真っ赤にした母は娘ひとりを東京に出す不安を口にした。東京は未だ新幹線も高速道路も通じていない遠い空の彼方にあつたのだ。母と違ってY子は決然としていた。

「先生、私は古里を出て行きますが、決して捨てるわけではありません。東京で私は先生のように世間の常識に惑わされない強い自分を探そうと思います。いつかは必ず古里へ帰って来ます。」

強い口調に私はY子を見つめてハッとした。Y子が子獅子になっていた。色紙の中の怒りに燃えた獅子になっていた。

Y子は東京へ去った。ぼくも5年後に観山を去った。

（出典・「すみよし」37号、徳島県立徳島商業高等学校・岡本顕史郎）

※

〈本冊子の表紙にY子さんが描いた獅子の絵をつかわせていただいた〉